

ニンフェアール第4回公演
～音の身振り・動きの響き～

Sound Gesture-Action Sonority

NymphéArt features

Tomoki Tai (vc) , Mari Asakawa (pf) & Maki Ota (sop)

Yoshiko Kanda & Achelya (guest dancers)

with composers, Miyuki Ito, Kumiko Omura & Mai Kawamura (guest)

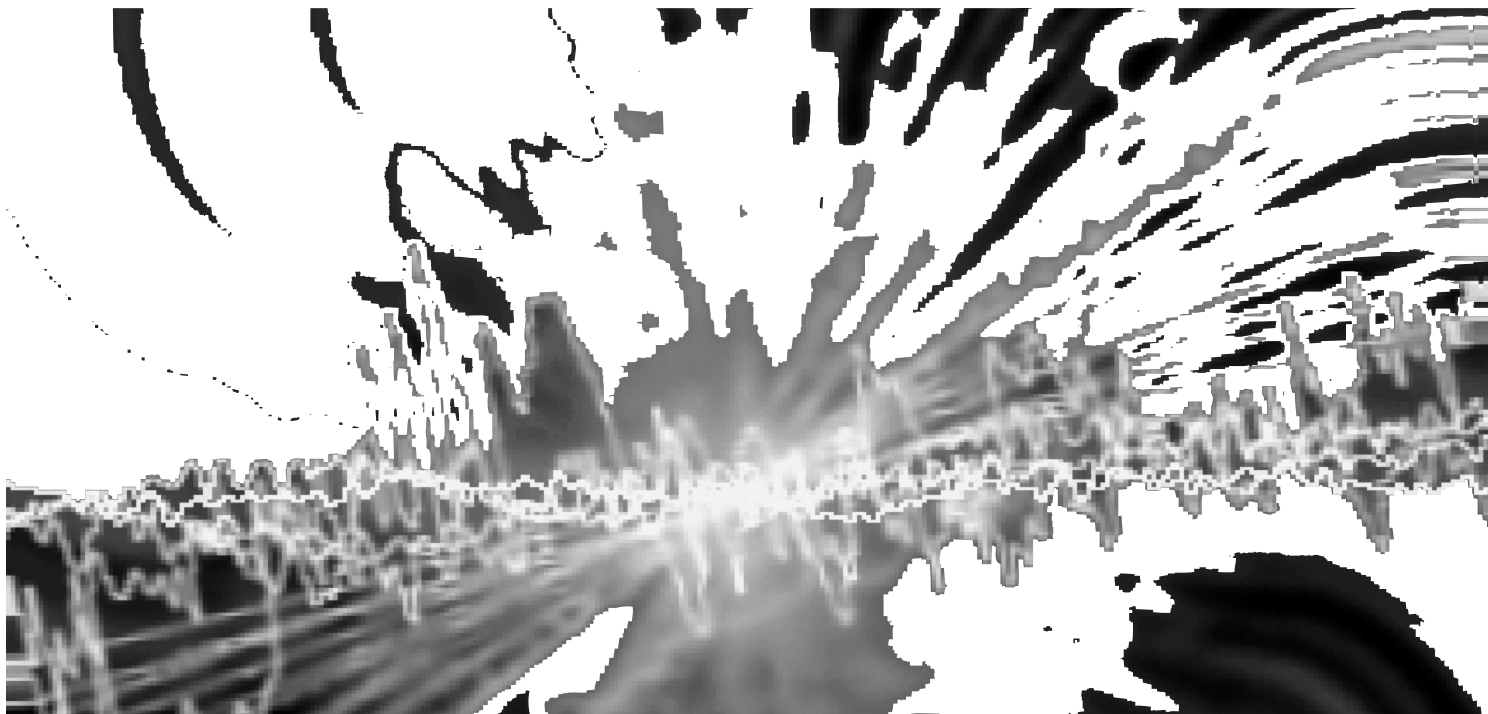
多井智紀(チェロ), 朝川万里(ピアノ), 太田真紀(ソプラノ)

賛助共演: 神田佳子(タップダンス), アチェリア(ベリーダンス)

伊藤美由紀 (企画/作曲、コンピューター)

大村久美子 (企画/作曲、コンピューター)

河村真衣 (招待作曲家、サントウール)





2008年5月30日(金) 18:30開演/19:00開場

名古屋市千種文化小劇場

主催: ニンフェアール

Nagoya City Chikusa Playhouse, Friday, May 30, 2008, 7:00pm

サントリー音楽財団推薦コンサート

助成: 芸術文化振興基金 , 野村国際文化財団 , 財団法人 ロームミュージックファンデーション

後援: 名古屋芸術大学音楽学部

録音・音響協力: 名古屋芸術大学音楽学部音楽文化創造学科サウンド・メディアコース

～ ごあいさつ ～
GREETING

本日はお忙しい中、ニンフェアール第4回公演にご来場頂き、有り難うございます。

今回の演奏会は、「音の身振り・動きの響き」というテーマのもとに、円形劇場の特性を生かした、視覚・聴覚的に響きと動きをお楽しみいただける内容でお送りいたします。

全ての作品は、“踊り”あるいは、“演劇的表現”に関連していて、アルゼンチンタンゴが素材のピアソラの作品、アメリカのモダンダンスカンパニーのアタックシアターの為に作曲した伊藤のチェロと電子音響による作品、タップダンスのステップを音楽的に再構築することによって生み出された大村の作品など、パフォーマンスとメディアの間における表現の可能性を追求する先駆的なプログラムになっています。さらに、近年活躍が目覚ましい若手作曲家の河村真衣を招待作曲家に迎え、瑞々しい感性によるベリーダンサーを伴う新作が発表されます。

このような多彩な音空間を五感でお楽しみいただければ幸いに存じます。

2008年5月30日

ニンフェアール



～ プログラム ～
PROGRAM

1. キャシー・バーベリアン：「ストリップソディー」(1966) (ソプラノソロ) (楽譜映像化：伊藤美由紀)
Cathy Barberian: *Stripsody* (1966) for soprano (with visualized score on screen)

2. 河村真衣：「海の真理」(2008) 世界初演 *
(ソプラノ、ピアノ、サントゥール (ペルシア古典楽器) とベリーダンスのための)
Mai Kawamura: *Truth of the Sea* (2008) for soprano, piano and santur with a belly dancer (WP)

3. 伊藤美由紀：「風神雷神化身」(2006/07) 日本初演 (映像改訂版) *
(チェロ、エレクトロニクスとライブ映像の為の)
Miyuki Ito: *The Incarnation of Thunder and Wind* (2006/07) for cello and electronics with live visual effect (JP)

～ 休憩 ～

4. 大村久美子：「タップ・ステップ・ジャンプ - ブレス・ソング」(2008) 世界初演 *
(タップダンサー、ヴォーカルとライブエレクトロニクスのための)
Kumiko Omura: *Tap Step Jump - Breath Song* (2008) for tap dance and vocal with live electronics (WP)

5. アストル・ピアソラ：「ル・グラン・タンゴ」(1982) (チェロとピアノのための)
Astor Piazzolla: *Le Grand Tango* (1982) for cello and piano

6. 伊藤美由紀：「虚空に灯る」(2008) 世界初演 *
(チェロ、ソプラノ、ピアノ、エレクトロニクスとライブ映像のための)
Miyuki Ito: *burning in the void* (2008) for cello, soprano, piano and electronics with live visual effect (WP)

出演： 多井智紀 (チェロ)
朝川万里 (ピアノ)
太田真紀 (ソプラノ)
アチェリア (ベリーダンス *2)
河村真衣 (サントゥール *2)
神田佳子 (タップダンス *4)
日栄一真 (インターラクティブ映像 *3・空間演出/LIGHTONE (ライトン制作指導) *4)
吉川敦 (インターラクティブ映像 *6)

録音・音響協力：名古屋芸術大学音楽学部サウンド・メディアコース

LIGHTONE (ライトン) LED 空間演出装置制作：名古屋芸術大学音楽学部サウンド・メディアコース学生
ニンフェアール(企画)：伊藤美由紀 (作曲/コンピューター)

大村久美子 (作曲/コンピューター)

1. キャシー・バーベリアン：「ストリップソディー」(1966) (ソプラノソロ)

この作品は、一人のソプラノ歌手によって書かれた。楽譜は、漫画の「コマ」で構成されている。「セリフ」に相当する部分が歌詞になる。一つ一つのキャラクターは一度しか登場せず、あまり意味のある言葉は発せられない。たとえば、日本語でいう「チックタック」(時計)、「ニャーニャー」(猫)、「げふっ」(ゲップ)など、いわゆるオノマトペのみ。作曲者のバーベリアンは、ことば＝うた、すなわち旋律を伴う歌曲という枠を超え、日常の言葉そのものを音楽に引き寄せようとした。

この楽譜を初めて見た時、無類の漫画好きの私はとにかく嬉しくて仕方がなかった。だって、譜面からぎゃあぎゃああと音がするんですもの！！普段は音を取り、音楽にするところ、この作品は、音が鳴っているのを交通整理する現場監督のような気持ちで演奏に臨みます。もしかしたら、会場にいらっしゃる皆様にも注意の笛を吹いてしまうかも・・・！！お気をつけくださいませ。(太田真紀)

2. 河村真衣：「海の真理」(2008) (ソプラノ、ピアノ、サントゥール、ベリーダンスの為の) (世界初演)

サントゥールはペルシアの古典楽器で、台形の箱に張られた72本の弦を、バチで叩いて演奏する打弦楽器です。この楽器の原型はすでに紀元前3000年のアッシリアで見られており、この楽器が後にヨーロッパに渡り、ピアノへと進化していったといわれています。おそらく日本初の試みとなるこの編成に、戸惑いながら、時には後悔しながら作曲しましたが、本日の初演を大変嬉しく思います。西洋楽器と日本人の演奏家、そして西洋音楽と日本の音楽双方の根源ともいえるペルシア音楽とダンス、これらをうまく融合させるのではなく、その対比を楽しみたいと考えながら書きました。

作品は3つのパートから成り立っています。第1のパートは、即興的な音楽、第2のパートは、静寂の中での踊り、そして最後は、明瞭でリズム的な音楽に合わせた激しい踊りです。テキストには、オマル・ハイヤーム(11世紀ペルシアの科学者・文学者)の4行詩を、原語のまま用いています。

以下に歌詞の内容を記します：

この万象の海ほど不思議な存在はない
その源まで辿り着いたものは誰一人としていない
誰もが勝手なことを言いはしたが
真理を明らかにすることは誰一人できない

(河村真衣)

3. 伊藤美由紀：「風神雷神化身」(2007) (チェロとエレクトロニクスの為の) (日本初演/映像改訂版)

この作品は、アタック・シアター(モダンダンスカンパニー、ピッツバーグ)からの委嘱作品である。今年2月1日にピッツバーグで、アタック・シアターと音楽監督でチェロ奏者のデイブ・エガー氏により世界初演されました。タイトルは、三十三間堂の“風神雷神像”に由来します。13世紀のこの風神雷神像をもとに17世紀の俵屋宗達の屏風絵から、現在の数々の作家の抽象的な作品に到るまで様々な風神雷神像の作品が存在します。それぞれの作品が、何か眼に見えない圧倒的な魂を秘めており、作品制作にインスピレーションを与えてくれました。ダンサーの為に作品を書くという点で、何かシンボルとなるキャラクターを示唆したかった故、自然への畏敬、除災を祈り風袋を背中に背負った風神と小太鼓を輪にめぐらせ両手にバチをもつ雷神を念頭に、自然界の眼に見えないエネルギーをチェロとエレクトロニクスの掛け合いによって表現しようと試みました。今回の公演のために、日栄一真氏にMax/jitter(ソフトウェア)を使用してインターラクティブ映像をプログラミングしていただきました。また、サウンドファイルの作成においては、委嘱者で初演者であるチェロ奏者のデイブ・エガー氏のご協力をいただきました。(伊藤美由紀)

[インターラクティブ映像の説明]

音声信号を数値化し、その数値を元にパラメータをコントロールし3次元の画像をリアルタイムで描き出します。また、そのパラメータに人為的なコントロールを加える事でコンピューターの計算結果に新たな変化をもたらす映像に変化をつけていきます。(日栄一真)

4. 大村久美子：「タップ・ステップ・ジャンプー ブレス・ソング」(2008) (タップダンサー、女声とライブエレクトロニクスの為の) (世界初演)

タップダンス、といえば、軽快な音楽に合わせてタップシューズの底をカチカチ鳴らしながら踊るダンスであるが、この作品には、そのような“伴奏音楽”は存在せず、タップダンサー自身が出した音をコンピューターを通して加工し、再生された音響に合わせてさらに次のステップを踏む、という、いわばフィードバック的に音楽が次々に展開していく。さらに女声は、ダンサーの内面を意味し、体の中を行き来する呼吸のノイズや、さまざまな発音によって表現される。そして、ダンスという外的に表現された動きと呼応しつつ、曲が進むにつれて融合し、リズムから長音への転成を経て、ひとつの音に収束する。それは、一人の人間の内的、外的世界の調和、ひいては、個人と世界との融和を願う作者自身の祈りの表明でもある。(大村久美子)

5. アストル・ピアソラ：「ル・グラン・タンゴ」(1982) (チェロとピアノ)

この作品は1982年の夏に作曲され、ロストロポーヴィッチに進呈されている。ロストロポーヴィッチが当時ピアソラについて知らなかった為、楽譜は数年間にわたって放っておかれたが、一度楽譜を観てからは、この曲に大変興味を持ち、タンゴについてピアソラからアドバイスを受け、お互い刺激を与え合い意気投合したと言われる。三部構成のこの作品には、ピアソラ作品の重要な特徴、綿密な構成、メロディックな発想、複雑なリズムがすべて盛り込まれている。控えめではあるが、情熱を秘めたイントロダクションは、これから始まる比較的長い13分程の劇的な展開を聴き手に予測させるかのようである。

ピアソラは「ピアノのパートを、しっかり綿密にタンゴの語法で書き込んだので、たとえ外国人でも、完璧にタンゴ固有のリズムで弾きこなすことができる。」と言ったそうだが、まさにその通りで、アクセント、スタッカート、レガートなどの細かい指示が絶え間なく変化し、その結果多彩なフレーズ、色彩を生み出している。(朝川万里)

6. 伊藤美由紀：「虚空に灯る」(2008)

(チェロ、ソプラノ、ピアノとエレクトロニクス、ライブ映像の為の) (世界初演)

この作品のアイデアを探していたとき、友人が南インドに一年間滞在することになり、休暇にインドを訪問の計画を立てていました。それ故に、インドに関心を持ち色々調べ始め、タゴールの詩と、インドの弦楽器のひとつであるヴィーナの音色を結びつけて、作品を書くことになりました。ヴィーナの音をコンピューターでスペクトラ分析をした結果を、作品出だしのチェロと声との微分音を使っての微妙な音色の掛け合いの部分に使用しています。作品制作中に、北京オリンピックの聖火のトラブルを聞きながら、“炎”を巡っての人間の魂みたいなものを感じ、複雑な気持ちで、微妙な心の揺れみたいなものを表現しました。(伊藤美由紀)

「ギタンジャリ」から ラビンドラナート・タゴール著

1. 荒廃した川岸の背の高い草むらのなかで、私は尋ねた。「少女よ、マントでランプをかざしてどこへ行くの? (*私の家は真っ暗で寂しい。その灯を貸してくれないか?)」彼女は、一瞬、黒い瞳をあげ、夕闇に私の顔をみた。「陽が西にかげったら、流れにランプを浮かべる為に川にきました。」と、彼女は答えた。私は、一人背の高い草むらの中に立って、彼女のランプの消えそうな炎が、虚しく流れに漂って行くのを見ていた。
2. 薄暗くなっていく夜の静寂のなか、私は尋ねた。「少女よ、あなたの灯は、輝いている。ランプをもってどこへ行くの? (*繰り返し)」彼女は、黒い瞳をあげて私の顔をのぞき、怪訝そうに一瞬、立ち止まった。「私は、このランプを空に捧げる為にきました。」と、彼女は答えた。私は、彼女の灯が、虚しく虚空に燃えていくのを見ていた。
3. 月影のない真夜中の暗闇のなか、私は尋ねた。「少女よ、胸のあたりにランプをかかげて、何を求めているの? (*繰り返し) その灯を貸してくれないか?」彼女は、一瞬、立ち止まり考え、闇の中で私の顔を見つめた。「私は、灯の祭りに加わる為に、ランプを持ってきました。」と、彼女は答えた。私は、彼女の小さなランプが虚しく他のランプのなかに吸い込まれていくのを見ていた。

テキスト日本語訳：伊藤美由紀

[インターラクティブ映像の説明]

カメラによるライブ映像、リアルタイムにマイクから入力したサウンドの映像化による描画、単純な静止画に曲の展開に合わせて動きやエフェクトを加えた映像など、主に3つのモチーフを用いてテキストのイメージを映像化します。これらはすべてjitterにより処理を行います。サウンドの映像化による描画では、サウンドのボリューム変化がjitter内で波形として出力され、その波形に動きやエフェクト処理、他の映像との合成をすることで炎のイメージを表現しています。(吉川敦)



多井智紀 (チェロ) Tomoki Tai (cello)

大阪生まれ。両親の影響で幼少より音楽に親しみ、9歳の時にチェロに出会う。中学の頃より日本と世界中の古楽、前衛音楽、ノイズに傾倒し、東京藝術大学にて学ぶ。ekiben, 多井武澤トリオ、セレブ弦楽四重奏団、Ensemble BOIS、next mushroom promotion、神戸愉樹美ガンバ合奏団などで作編曲と演奏を行っている。参加CDに「細川俊夫 作品集 X」 next mushroom promotion (fontec,2006)、「Strings Fields Forever」セレブ弦楽四重奏団 (Sony,2007)、「ごった煮」セレブ弦楽四重奏団 (Celeb Record,2007)がある。



朝川万里 (ピアノ) Mari Asakawa (piano)

東京生まれ、5歳よりピアノを柿沼洋子氏に師事。12歳で家族とともにニューヨークに移る。15歳でウエスト・チェスターコンクール優勝、グリーグのコンチェルトを演奏。続いてリンカーン・センターでバッハのコンチェルトを演奏。翌年16歳でジュリアード音楽院に入学し、ジョルジュ・シャンドール氏に師事。卒業後はエール大学大学院音楽科に進む。卒業後はアメリカ国内の数々のコンクールに入賞。1998年よりイタリア、ペスカーラ音楽院でメツェーナ氏に師事する。1999年、フロレスタノ・ロッソマンディ国際ピアノコンクール入賞。2002年には、すみだトリフォニーホールとスイスのティチノ・ムジカ音楽祭でリサイタルを行い好評を得る。2003年春、ラ・スベツィア、ヴェネツィア、ナポリで連続リサイタル。2003年にはプロコフィエフ没後50年を記念して、イタリア、日本、イギリスを含む合計10ヶ所でプロコフィエフ・ピアノソナタ・リサイタルを開催した。現在、イタリア各地の講習会、音楽祭でメツェーナ氏の助手を務める。2005年2月、イタリア PHOENIX Classics からプロコフィエフ：戦争ソナタ（第6番、第7番、第8番）のCDがリリースされた。東京津田ホールにてCD発売記念リサイタルを開催し大好評を得る。イタリア、日本を中心に演奏活動を行う。2008年3月にはバリ・日本館にて「20世紀の音」と題するピアノリサイタルを開催した。2005年4月より愛知県立芸術大学非常勤講師。



太田真紀 (ソプラノ) Maki Ota (soprano)

同志社女子大学学芸学部声楽専攻卒業、同志社女子大学音楽学会《頌啓会》特別専修生修了、大阪音楽大学大学院歌曲研究室修了。川下由理、山村弘、ヘルベルト・ブラウアー、平山美智子の各氏に師事する。多くの現代声楽作品の日本初演や松平頼暁、近藤謙などの新作初演を手がけ、2004年に日本現代音楽協会主催コンクール「競奏VI」にて第3位に入賞する。2007年トーキョーワンダーサイト主催リサイタルシリーズ出演、さらに2008年1月東京でのシルヴァーノ・ブソッティ来日コンサートにおける演奏が同氏に絶賛される。現在ソロ活動の他、東京混声合唱団団員として全国各地の公演に参加している。



アチェリア (賛助共演：ベリーダンス) Achelya (belly dance)

愛知県尾張旭市出身。幼児期から様々なダンスを習い、ベリーダンスにいたってはエジプトスタイル、トルキッシュスタイルにフラメンコの振り付けを取り入れ、小柄ながらも情熱的で女性らしい素敵ベリーダンスを披露する。常に笑顔を忘れず、観客を魅了する。他にもフラメンコとマジシャンのコラボで各地のイベントに出演中。多方面で活躍しています。



神田佳子 (賛助共演：タップダンス) Yoshiko Kanda (tap dance)

横浜生まれ。現代音楽を中心に幅広いジャンルで活躍する打楽器奏者。東京芸術大学卒業及び同大学院修了。ダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会（ドイツ）で奨学生賞を受賞。オーケストラと共演の他、東京オペラシティ主催リサイタルシリーズ「B→C」、TV朝日「題名のない音楽会」などに出演。ビクターエンタテインメントよりCDをリリース。最近では、正倉院復元楽器の演奏、古楽器との共演など、時代を超えた打楽器演奏の可能性にアプローチしている。ジャズピアノとのデュオ“TANAKANDA”、PERCUSSION TRIO “The Birds”のメンバー。また作曲家として数多くの作品を手掛け、タップダンスを入れた作品「TAP CATS～ファゴットと打楽器のための～」等の自作自演も行う。

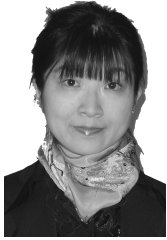
日栄一真 (インタラクティブ映像プログラミング) Kazumasa Hiei (Visual effect programming)

主にCLUB MUSICを中心に、音楽制作、エンジニアを行う、またLAPTOP,MIXER,EFFECTORを使い、即興的に音楽を構築していくライブパフォーマンスでも活動し、京都の寺院にて能の笛方とのコラボレーションや、Francois K, 半野善弘、AOKI Takamasa,等とも共演、また、制作においては、NEW YORK KING STREETや国内のレーベルからも音源をリリース、その他、フランス、イェールモードフェスティバルの音楽を担当。名古屋大学、名古屋芸術大学非常勤講師。

吉川敦 (インタラクティブ映像プログラミング) Atsushi Yoshikawa (Visual effect programming)

名古屋芸術大学音楽学部音楽文化応用学科サウンドメディア専攻、名古屋芸術大学大学院音楽研究科音楽学音楽制作専攻終了。同大学のサウンドメディアの一期生でmax/mspの講座が初めて開講されたときよりmax/mspを使用し始める。在学中の演奏会ではオーケストラとmax/mspのための作品や歌とmax/mspによる即興的な作品などを発表。近年は映像プロダクションにも所属し、テクノロジーを学ぶことでアートとテクノロジーの架け橋となりjitterを使用した映像制作も行っている。

ニンフェアールメンバー



伊藤美由紀 (作曲/コンピューター) *Miyuki Ito (composer/computer)*

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程(ニューヨーク)、コロンビア大学博士課程(ニューヨーク)修了。芸術音楽博士。寺井尚行、ピエール・シャルベ、トリスタン・ミュライユ、フィリップ・ルローの各氏に師事。文化庁芸術家在外研修員として、IRCAM (フランス国立音響研究所)にて研鑽を積む。神奈川県合唱曲作曲コンクール、アポット室内楽作曲コンクール(ボストン)、Boris & Edna Rapoport賞(NY)、名古屋文化振興賞、日本交響楽振興財団作曲賞入選など、受賞。ハーモニアオペラカンパニー (NY)、東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン (NY)、アタックシアター (ピッツバーグ) などによる作品委嘱ほか、カーネギーホール (NY)、レゾナンス・フェスティバル(パリ)、ISCM世界音楽の日々(香港)、国際コンピューター音楽会議 (マイアミ)、SMC07(サウンド&ミュージック・コンピューティング国際会議/ギリシャ)、Re:New 08 (デンマーク)をはじめ、世界各国の現代音楽祭で作品が演奏される。ゲラルド・オーシタフェローシップとともに2005年春、カリフォルニア・ジェラシ・アーティストレジデンスにて創作活動。「Fading Memories…」が、関澤真由美マリンバソロアルバムCD「My Favorite Things」(AUCD-13)に収録。現在、愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、千葉商科大学にて教鞭をとる。



大村久美子 (作曲/コンピューター) *Kumiko Omura (composer/computer)*

東京芸術大学作曲科を卒業後、ドイツ・エッセンの Folkwang 芸術大学にて、作曲をニコラウス・A・フーバー氏に、電子音楽をルドッガー・ブルンマーの各氏に師事。その後パリのIRCAM (フランス国立音響研究所)にて電子音楽の研鑽を積む。帰国後、東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻にて古川聖氏のもとで、マルチメディアアートの研究をする。卒業後、文化庁芸術家在外研修員として渡独し、引き続き現在もカールスルーエのZKM (芸術とメディアの為にセンター)の客員芸術家として創作活動を行っている。作品は、第15回入野賞オーケストラ部門 (1994)、オランダのガウデアムス作曲賞グランプリ (1998) ドイツのハノーファー・ビエンナーレ (1999)、武生作曲賞 (2004)、日本現代音楽新人賞 (2005)などを受賞。ヴィッテン音楽祭、musica viva (ドイツ)、アゴラ・フェスティバル、Centre Acanthes(フランス)、国際コンピューター音楽会議 (1999ベルリン)、アジア音楽祭などの欧米や韓国、日本の各地で演奏され、齋藤貴志サクソフォン作品集CD (ALM Record)、コンピューターミュージックジャーナルDVD (MIT、アメリカ)、ヴィッテン音楽祭CD (西ドイツ放送局)に収録されている。

ニンフェアール：2004年設立。ニンフェとは、フランス語で睡蓮(すいれん)の意味で、ギリシア神話の乙女ニンフともかけてあり、またこのニンフという単語はさなぎという意味もあります。アールはフランス語で、アートを意味し、私達はこの団体名のもとに、美しく新鮮で、これからの可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。これらのニンフェアール公演は、愛知県内外で好評を博し、これまでに朝日新聞(2005、2006、2007)、モストリークラシック (2007)などの記事にとりあげられる他、発表された作曲メンバーの作品が、国内外(東京、ドイツ、デンマーク、アメリカ)で再演されるなど、一回の公演にとどまらない広がりを見せています。2008年公演企画中。nymphheart@yahoo.co.jp



河村真衣 (招待作曲家) *Mai Kawamura (composer)*

1979年 大阪府に生まれる。大阪音楽大学作曲学科作曲専攻卒業、大阪音楽大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。作曲を故山口福男、近藤圭、久保洋子、細川俊夫の各氏に師事する。在学中から多くの作品発表の機会を持ち、2003年に第72回日本音楽コンクール作曲部門(室内楽)入選、第20回現音作曲新人賞入選、2005年には第21回名古屋文化振興賞入選、第27回日本交響楽振興財団奨励賞受賞を果たす。2007年には東京シンフォニエッタによる委嘱作品初演、武生国際音楽祭にて作品が演奏される。

- more info -

♪ キャシー・バーベリアン(1925-1983)：アメリカの声楽家、作曲家。1960年代の前衛音楽の「パフォーマンス」、「シアター・ピース」の発展に貢献し、さまざまな唱法を駆使して声楽家の表現力を拡大した。

♪ 黛 敏郎(まゆずみ としろう) (1929-1997)：20世紀日本の現代音楽を代表する作曲家の一人。仏教や日本文化を題材にした作品を生み出す一方、初期の日本の電子音楽における第一人者でもある。また、テレビ番組の「題名のない音楽会」の司会も担当した。

♪ アストル・ピアソラ(1921-1992)：アルゼンチンの作曲家、バンドネオン演奏家。タンゴを元にクラシック、ジャズの要素を融合させた独自の演奏形態を生み出した。

♪ Max/msp,jitter (ソフトウェア)：音楽のためのグラフィック・プログラム開発環境。IRCAM (パリ)においてミラー・パケットを中心に1986年から開発が始まり、のち、Cycling74 (サンフランシスコ)とともに、販売される。リアルタイムでのインターラクティブ・ソフトウェアとして現代音楽の世界において、限りない可能性を与えている。Jitterは、映像処理に使われる。今回のプログラムのなかで、伊藤美由紀、大村久美子の作品は、このソフトウェアを使用している。

[ニンフェアール過去の公演実績]

ニンフェアール第1回公演：「古楽器の現在」

名古屋市港文化小劇場 2005年5月21日

名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団企画公演、国際芸術フェスティバル参加公演

助成：フェスティバルメセナ助成、サントリー音楽財団推薦コンサート

後援：名古屋芸術大学音楽学部、協力：テレビマンユニオン

出演：ガス・ノックス（ヴィオラ・ダモアレ、ヴィオラ）、鈴木俊哉（リコーダー）

ニンフェアール第2回公演：「林、森、虹、息一声と弦による贈り物」

名古屋市港文化小劇場 2006年5月13日

名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団芸術公演

助成：朝日新聞文化財団助成、サントリー音楽財団推薦コンサート

後援：名古屋芸術大学音楽学部

出演：天羽明恵（ソプラノ）、鈴木大介（ギター）、後藤龍紳（ヴァイオリン）

ニンフェアール第3回公演：「音とテクノロジーの対話」

愛知県芸術文化センター 2007年9月26日

愛知県芸術文化センターとの共催、「AAC サウンドパフォーマンス道場」関連企画


助成：芸術文化振興基金、ロームミュージックファンデーション、サントリー音楽財団推薦コンサート

協力：名古屋アメリカンセンター

後援：名古屋芸術大学音楽学部

出演：八木美知依（箏）、エリオット・ガッテンニョ（サクソフォン）、カール・ストーン（ラップトップ・ミュージック）、夢宙屋（照明アーティスト）

主催：NymphéArt (ニンフェアール)

助成：芸術文化振興基金 、ロームミュージックファンデーション、野村国際文化財団

後援：名古屋芸術大学音楽学部

<協力スタッフ>

音響：堀山愛子

音響アシスタント：日比野真、早川 彰久

録音：長江和哉

舞台：鈴木昭宏、山口晃、薬師航太

案内：酒井絢子、平山桃子